

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520753

研究課題名(和文) 占領と広島復興

研究課題名(英文) The Occupation and the Restoration of Hiroshima

研究代表者

布川 弘 (Nunokawa, Hiroshi)

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：30294474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)： 敗戦直後の占領下の広島における社会の実態について、以下の研究成果があった。(1)環境が介在して発生する内部被曝の実態把握について、日本占領関係資料やオーストラリア軍の資料を用いて、当時の科学的な調査に関する手がかりを得るとともに、社会的文化的な脈絡で民衆がどのように被曝をとらえたかを明らかにすることができた。(2)広島・呉において陸海軍の医療施設が地域社会と深く結びつきながら、高度な衛生システムを構築し、原爆調査においてもそれが歴史的前提となったことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： About the social actual situation in Hiroshima under the occupation just after the defeat, there were the following results of research. (1)About actual situation grasp of the internal radiation exposure that environment intervened and occurred, I got the clue about the scientific investigation in those days using a Japanese occupation relations document and the document of the Australia forces and was able to clarify how the people arrested radiation exposure in a social cultural connection. (2)While the medical facilities of army and navy were tied to a community deeply in Hiroshima, Kure, I built a high hygiene system, and it clarified that it became a historic premise in the atom bomb investigation.

研究分野：人文学

キーワード： 占領 被曝 ヒロシマ 英連邦軍 ABCC

### 1. 研究開始当初の背景

戦後 70 年をむかえ、戦争の記憶をどのように受けとめ、次世代にどのように継承していくかが世界的に大きな課題となっている。戦略爆撃の一環として世界で最初に原爆が投下された広島は、20 世紀の戦争の性格を考察する上で極めて重要な研究対象であり、上記の課題に応える意味で、格好な素材として、世界的な注目を集めている。

### 2. 研究の目的

(1) 従来、原爆の被害についての研究は、被爆の実態についての研究を中心に、多様な角度から積み重ねられてきた。しかし、原子爆弾の爆発に伴う放射線の外部からの被爆に注目があつまり、環境汚染を介在した人体への内部被曝はあまり注目されてこなかった。本研究は、従来指摘されてきた入市被曝や「黒い雨」の問題も含め、大気や水の汚染を媒介として人体が影響を受ける内部被曝に注目し、その実態を明らかにしようとした。

(2) 本研究は、占領期を戦争の期間としてとらえ、その時期における社会や人々の生活の有様を戦争の記憶としてとらえる。従来は、民主化・非軍事化という政策の基本的な理念を前提として、占領政策の実態に注目してきた。本研究では、日本社会の特質に注目し、そこから占領期の実態を考察した。

### 3. 研究の方法

(1) 内部被曝の実態については、占領期の被曝調査が注目される。その際、降伏前に日本の軍部が行った綿密な調査が注目される。幸いその調査は、国立国会図書館が所蔵する日本占領関係資料に含まれている。既に一部の研究において活用されているが、本研究ではその成果を受け継ぎ、内部被曝の問題に焦点を当てながら、日本占領関係資料の精査を心がけた。

(2) 占領期の社会や人々の生活実態を明らかにする上で、敗戦直後の自治体レベルの公文書が極めて乏しい現状がある。従来、それを GHQ/SCAP ドキュメントなどアメリカ軍資料を用いて、その欠落を埋めてきた。しかし、アメリカ軍の軍政下にありながら、広島を占領したのは英連邦軍 (BCOF) であった。本研究では、英連邦軍の主力を担ったオーストラリア軍の資料を使用し、そこから占領期の広島の社会や生活実態を浮き彫りにしようとした。

(3) 占領期の被曝調査や広島の生活実態に関する研究は、日本国内だけではなく、諸外国でも著しい進展を見せている。しかしながら日本国内では、そうした諸外国における研究を十分受け止めているとは思えない。本研究においては、被曝実態についてはアメリカの研究、占領期の実態についてはオーストラリアの研究に注目し、オーストラリアにおける研究については文献リストを作成して、出来る限り蒐集するようにした。

### 4. 研究成果

(1) 日本占領関係資料を用いた被曝調査についての精査は、いまだ終了していない。したがって現在進行中の課題ではあるが、途中経過での成果を述べるとすれば、戦時中の日本軍の調査において、米軍の戦争犯罪を立証するという目的があったために、極めて広範囲な被曝調査が行われていたことが確認された。さらに、内部被曝という観点から見た場合、広島市周辺部における調査において、被爆後に広島市内に入った人々とそうでない人々の症状の比較などの調査が行われ、原爆による被曝を受けていない人々への強い関心が見られることが確認された。しかしながら、それ以上の調査が試みられていないことも注目される。この点は、今後の調査で明らかにしていきたい。

(2) 日本占領関係資料の調査を進めながら、従来明らかにされた国内の資料、及びオーストラリア占領軍の資料にあたった結果、地域の民衆が被曝の問題にどのように向き合ったかを物語る貴重な事実が明らかになった。具体的には、広島湾に浮かぶ似島において、多数の被爆死者の遺体が処理されたことを原因として、近隣の住民が病気の「感染」を恐れて近づかなかったこと、それ以前に遺体の埋葬を請け負った人々が、やはり「感染」を恐れて遺体を放置した事実があった。これらは、科学的な判断に基づく行動とは言えないが、民衆の自前の経験に基づく注目すべき行動で、現在から振り返って見た場合、内部被曝を避ける行為であったと考えられる。従来、民衆が流言飛語や風評に惑わされる様子に注目があつまっているが、民衆の具体的な対応を再検討し、社会的文化的な脈絡で被曝をどのように受け止めたかを考察することが、新たな課題として浮かび上がってきた。

(3) これは今回の研究テーマに直接つながるものではないが、日本軍、とりわけ陸海軍の医療機関の調査能力や医学レベルの高さに触れるなかで、広島周辺の軍の医療機関と地域の関係について、若干時代を遡って考察した。その結果、鎮台・師団が明治初年から整備された広島において、陸軍病院が早くから整備され、北清事変・日露戦争において、文明国であることを欧米列強に認知させるという目的もありつつ、医療・衛生体制が急速に整備され、敵国の俘虜に対しても平等な治療が施されたことを、イギリスやアメリカの報告書を使って、明らかにすることができた。また、海軍鎮守府が置かれた呉においても、早くから海軍病院が整備され、さらに兵員の健康を維持するために、地域の衛生体制に海軍が深く関わり、さらに、地元の熱心な開業医の働きかけの下、海軍と開業医たちが密接な関係を構築し、先端医療が地域に還元され、一方開業医の協力を得て、地域の衛生体制が急速に整備されていく様子を明らかにすることができた。

(4) オーストラリア戦争記念館 (Australian War Memorial) やオーストラリア国立図書館 (National Library of Australia) の所蔵する英連邦軍の資料を調査する中で、オーストラリア軍兵士の性病罹患率が極めて高いことが明らかになった。この問題は、当時占領軍全体の問題として注目され、さらに本国のオーストラリアにおいては、恥辱に満ちた問題として、世論の指弾を受けることになった。オーストラリア軍を中心とする英連邦軍は、占領軍たる威厳を示し、紳士として生活の模範となるため、猥に現地住民と接触することを禁止する政策を採用した。占領軍側では、それと娯楽設備の不足などが、性病罹患率の高さにつながり、主として日本人娼婦と関係をもつ買春が原因であると考えていた。その結果、日本人売春婦の取締に積極的に取り組むことになった。こうした事実については、従来アメリカ占領軍の研究において明らかになっており、オーストラリア軍も同様であったということが確認できる。しかし本研究は、占領軍の資料を用いながらも、日本社会の当時の有り様という視点から、性病罹患率の高さを考察した。オーストラリア占領軍が性病を撲滅するための様々な政策を実施するなかで、そこで発生した文書を検討した結果、注目すべき事実が明らかになった。とりわけ、多額の前借金を抱えて人身売買として売春の制度が成り立っている伝統的な構造が脈々と生きており、GHQ が当初に打ち出した売春防止の指令が全く機能していたなかったことが明らかになった。これは従来指摘されてきたが、オーストラリア軍の資料を見ると、性病に罹患した娼婦が結核を併発している事例が多いこと、また、娼婦が食事を節約する中で、家族は三食白米を食べられるレベルの生活が実現していたことなどに注目し、敗戦直後において一般に飢餓が広がっていたことが指摘されてはいるが、性病に関わる人々の栄養状態がとりわけ劣悪であったという事実が浮き彫りになった。本研究では、そうした事実の根底に、伝統的な社会的文化的背景によって売春が息づいており、日本社会における女性に対する凄まじい暴力の歴史的な存在に注目することの重要性を指摘した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

1. 布川弘, 広島の都市形成と第五師団, 坂根嘉弘編『地域のなかの軍隊5 中国・四国西の軍隊と軍港都市』(吉川弘文館), 査読有, 2014, pp.16-40

2. 布川弘, 日本における核の「平和利用」論の展開, 高橋伸夫編『東アジア研究講座 アジアの「核」と私たち フクシマを見つめな

がら』, 査読有, 慶應大学東アジア研究所, 2014, pp.1-28

3. 布川弘, 国際的な平和運動における新渡戸稲造と賀川豊彦, 『賀川豊彦学会論叢』, 査読有, 第21号, 2013年, pp.1-38

4. 布川弘, 広島における『平和』理念の形成と『平和利用』の是認, 加藤哲郎・井川充雄編『原子力と冷戦 日本とアジアの原発導入』, 査読無, 花伝社, 2013, pp.109-128

5. Hiroshi Nunokawa, Defeat and 'the City of the Dead', Cultural Interaction Studies of Sea Port Cities, No.7, 査読有, October, 2012, pp.45-62

[学会発表](計3件)

1. Hiroshi Nunokawa, The Supreme National Interest? : War and Hygiene System at the Dawn of Twentieth Century, Society for Social History of Medicine, 10-12 July 2014, St. Ann College, University of Oxford, U.K.

2. Hiroshi Nunokawa, The Making of the Modern State in Japan and Naval Expertise: The Naval Hospital and Public Health, May 10-11, 2013, Naval Expertise and the Making of the Modern World, Wolfson College, University of Oxford, U.K.

3. Hiroshi Nunokawa, The 'Atomic Plague' and the Low-dose Radiation Exposure, The Sixth Conference for the Asian Society for the History of Medicine, 13-15 December 2012, Keio University (Hiyoshi Campus), Japan

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

布川 弘 (NUNOKAWA HIROSHI )  
広島大学・大学院総合科学研究科・教授  
研究者番号：30294474

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：